

原子力市民委員会オンライン企画
「原発ゼロ社会への道」最終回

原発ゼロ社会をどうつくるか

原発の安全性はなぜ成立しないか

～最終的な決定権は住民・市民にある～

2021年8月30日

元東芝 原発設計技術者、CCNE委員

後藤 政志

原発の安全性はなぜ成立しないか

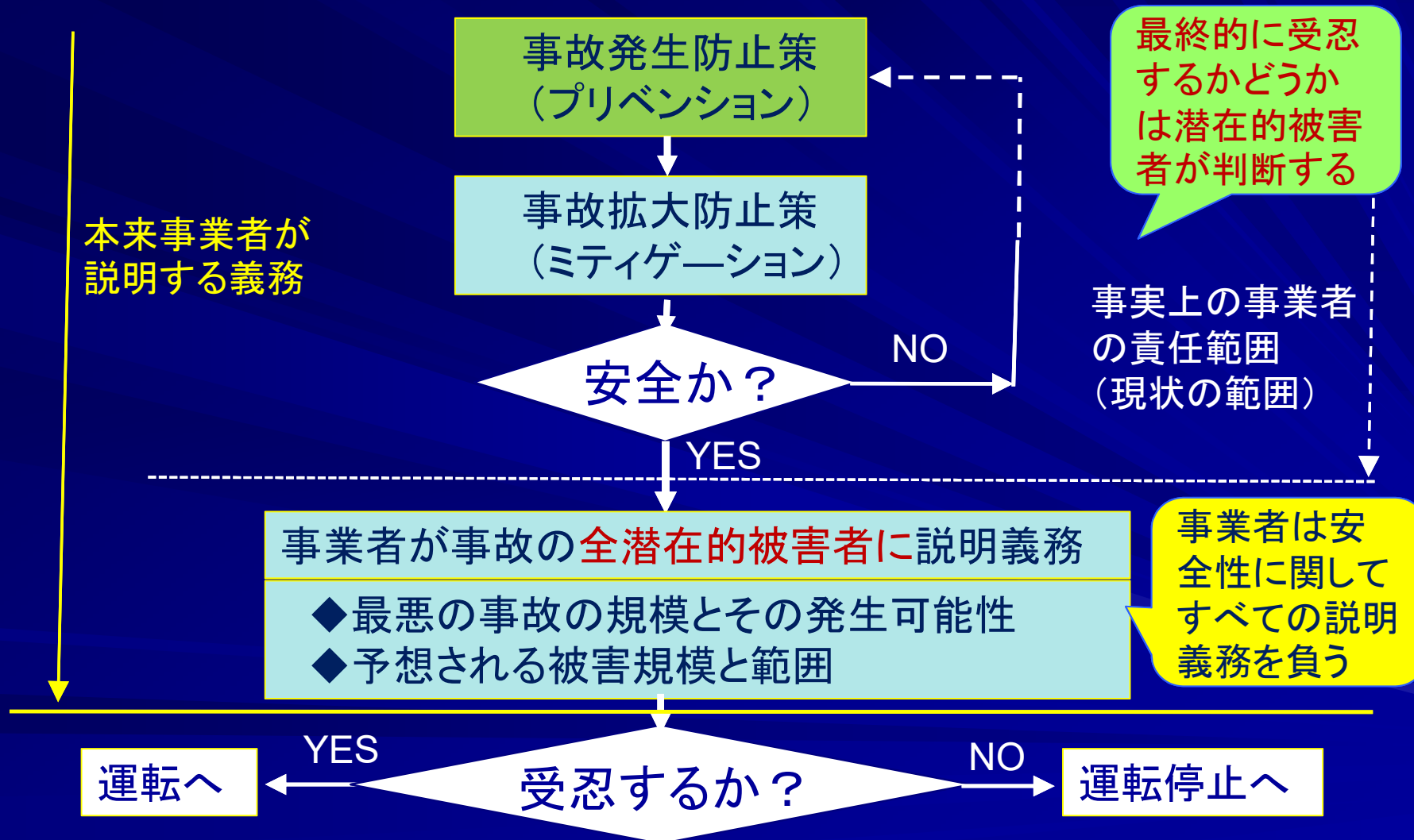
◆福島事故の原因はまだ多くの未解明問題がある

- * シールドプラグで高濃度の汚染
 - * 格納容器ベントが水素爆発を誘発？
 - * シビアアクシデント対策が事故の原因を構成？
- ⇒未だに原子炉建屋で詳細調査できない

◆原発の安全性は、多重防護、多層防護、独立性を基本にしているが、福島事故でそれが破綻している。

- * フェイルセーフシステムの破綻(安全設計思想の破綻)
耐圧ベント失敗／格納容器漏えい／水素爆発／IC 等
- * 多層防護が安全性を阻害する仕組みになってしまう。

事故防止の考え方と対象技術の受忍



原発は受忍できない技術だが・・・

- ◆ 手続きとしては、事業者・規制側に、安全性の説明義務を負わせる。
- ◆ 安全性の説明会には、潜在的な被害者は参加する権利がある。市民が要請した専門家も議論に参加すべき。
- ◆ 原発事故の規模は限定できないから、潜在的被害者を行政の都合で限定してはならない（事実上だれでも参加）。
- ◆ 説明を聞いた住民、市民は潜在的被害者として受忍するかどうか、一人ひとりが判断する。（投票する等）
- ◆ 原発事故の危険性は、いのちの問題であり、生存権の問題であるから、拒否する人がいたら、その意見を尊重し、了解を求める義務を負う。民主的手続きによるようになる。

意思決定権をとりもどすこと

◆ 忖度ない議論の必要性

- ⇒十分内容の説明は聞かすが、無意味な宣伝は拒否する。
- ⇒グレーゾーンの問題を安全性の論理で切る。
- ⇒原発の利点とは比較にならない「原発事故の被害規模」
- ⇒エネルギー選択の多様性は大事だが「原発は対象外」

◆ 科学と政治の役割と統合

- ⇒技術図書さえ、黒塗り・白抜きは科学・技術の絶対的否定
- ⇒科学・技術には「人間の制御が困難な領域がある」
- ⇒にも関わらず、福島事故以前の「安全神話、不確かな安全」が横行していること。

◆ 政治家、裁判官に「福島事故の被害」と「安全性の考え方」を分かってもらう努力を続けたい。

- ⇒今が「原発ゼロ社会へ急接近」できる重要な機会だ